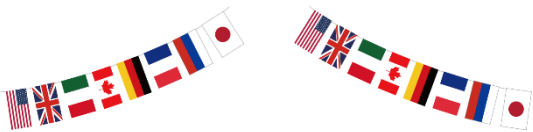


スポーツおじいさんにないたい！②



『チャレンジャーズ』

國友万裕



1. 無意識だったことを意識化すると……

いきなり、際どい話で恐縮なのだが、最近になって俺の陰部の謎が解けた。

実は俺は、睾丸が普通の男性よりも相当大きいのだ。普通の人の、3、4倍くらいのおきさだ。これは赤ちゃんのときからで、おばあちゃんが心配して、病院に連れて行ったこともあるくらいなのである。

その時、その病院の先生は、「大きい方がいいんですよ（笑）」と豪快に笑っておっしゃったのだそうである。

その後、俺はそのことに関してはそれほど気にしたことはなかった。長いことプールに通っていたので、短い競泳用のパンツをはくことはあったが、睾丸が大きいことを他の人から指摘されたことはなかったし、一旦水に入ってしまうえば体は見えなくなる。仲のいい男の人と温泉に行くこともあるが、人の股間なんてみんなジロジロ見ない。

ところが、最近になって、マッサージの人からそのことを指摘され、たまたま泌尿器科に頻尿の治療のために通っているので、その先生にそのことを相談してみたのだった。

すると、なんと、鼠蹊ヘルニア（脱腸）がその原因だったのだ。だから睾丸が大きいわけではなく、脱腸で、腸がはみ出しているので、大きく見えるのである。

コロナの前だから6年くらい前だったと思うが、鼠蹊ヘルニアのせいで、救急車で運ばれたことがある。あの時の痛さは大変なものだった。

あの時は若い男の先生が2人、一生懸命ヘルニアを体の中に入れようとしていたのだが、うまく入らない。そこにベテランの年配の先生がやってきて、ぐっと押すとすっ

とヘルニアはおさまった。医者は年寄りの方がいと言われるが本当にそうだなあと実感したのだ。思えば、あの時手術を勧められたのだが、忙しいし、怖いし、しなかったのである。

今回の泌尿器科の先生は、「無理に手術する必要はないけど、もし気になるんだったら、ヘルニアの手術をすれば普通になるし、紹介状を書いてもいい」と言ってくれた。

しかし、ネックがあった。全身麻酔の手術でするみたいなのだ。俺は全身麻酔は嫌なのだ。前に骨折した時に一度だけ経験があるのだが、一瞬のうちに意識がなくなる。あれは怖い。

もちろん、手術は寝ている間に終わるので、医者の方はその方が楽なのだろうが、そのまま目が覚めなかったら、手術の最中に地震でも起きたらという気持ちにもなってくるのだ。どこか部分麻酔でやってくれるところないかなあとと思っているのだけど、この頃の医者は手術というと必ず、全身麻酔だとか言ってくる。部分麻酔でできる手術でも、全身麻酔のほうが医者の方はやりやすいのだろう。

まあ、このままでいいかと思った。一般人に見せるようなところではないわけだから。

だけど、その部分を意識し始めると異常にそのことが気になるようになってくる。これまではプールに行ってもお風呂に行っても、全然気になっていなかったのが、この頃はみんな俺の股間を見ているんじゃないかという気持ちになってきて、意識してしまう。

人間って、そんなものなのだ。意識し始めると、他の人は大した問題とは思っていないくても、本人にとっては問題が大きくなっ

ていく。

スポーツ問題にしても、俺は子供の頃から、運動神経ゼロだと言われ続けた。親や親戚からも言われ、先生たちや周りのクラスメートからも言われ続けた。だから俺は子供の頃からその部分を過剰に意識するようになって行った。

俺は60歳になった今でも、そのトラウマをどうすることもできない。俺を傷つけてきた人たちは、俺をこれだけ傷つけたことを覚えてもいないだろう。言っている方は深い意味はないのだ。別に相手が運動神経が良かろうが悪かろうが、他人からしてみれば、そんなのどうでもいい。軽い気持ちで、冗談半分で言っているのだ。しかし、言われている当人には、それが一生消えない重荷になることだってあるのだ。

人間って、本当に嫌な生き物。

それはそれでいいのかもしれないのだ。この世が理不尽で、嫌な奴に満ちた社会だということがわかっているから、この後老いて、天に行くのも怖くなくなる。

俺が洗礼を受けたのは一つにはそのせいだ。洗礼は天国へのパスポート。きっとこの世よりもいい世界が死後の世界には待っているのだ。

2. 男という快樂

2ヶ月ほど前だ。

ボクシングでちょっとトレーニングが高度になって、元教え子のトレーナーからお腹を殴られた。何回も殴られた。俺は、殴られるたびに、「いてゑ〜」とうずくまった。

その後、その日はまともに眠れなかった。上体を起こしたような変な姿勢で眠ったの

だった。その後も痛みは1週間くらい続いた。

次にジムに行った時に、「俺はもう 60 歳なんだから、あれはやめてくれ。あれだと仕事に響くんだ」と元教え子に訴えた。ところが、彼の方は俺がそれを言ってもどこ吹く風。「殴り合うのがボクシングじゃないですか」と荒っぽいトレーニングをやめようとししないのだ。

彼は 20 代半ばだから、まだまだ若い。ちょっとぐらい痛みが残っても、深刻な問題とは思っていない。

マッサージの人にそのことを話したら、「いじめられているんでしょうに」と言われた。そのマッサージの人も、時として、ものすごく痛い治療をしようとするのである。「止めて！いてえ！」と俺が叫んでも、「ちょっと押しているだけです。大丈夫です」と一向にそれをやめようとししない。

思えば、この人も子供の頃から体育系で、スポーツクラブのインストラクターをしていたこともある人だった。

体育系のやつって、こんなものなのかと俺は思った。

「痛い！」ことをわざとやる。それが特訓みたいな雰囲気なのだろう。

先日のボクシングのトレーニングでは、元教え子から、「僕の顔を殴ってください。一回殴れたら、練習終わりにします」と言われた。

とは言っても、彼の方は俺が殴ろうとしても、器用に体をかわしていく。殴るに殴れない。それに教え子の顔を殴るなんて、どうしても躊躇してしまう。「俺は元々人の顔を殴れるような性格じゃないんだよ。俺は M なんだから」と彼に言った。

「じゃあ、僕が先生を殴るのは良いんですよ？ M なんだったら」と彼は笑って答える。「それは、それで困るけど、、、」と俺。

「本当にこいつは俺の体のことを真面目に考えていない」と本当に半ば切れそうにもなるのだが、なんとなく体育会気分で嬉しくなる部分もあるのだった。

ここのジムに行って楽しいのは、でかい声で、「ありがとうございます！」「おっす」と掛け声をかけることができる自分になったことだ。

ここは小さなジムで、若い男たちがメイン。女の人ほとんどいない。だから恥も外聞もなく、体育会っぽい掛け声がかけられる。昔の俺だったら柄にもないことだから躊躇していただろう。

上半身裸になって、練習することだってできる。この間も暑かったせいで、後半はずっと上裸のままトレーニングをした。元教え子は、「そんな汚い体をださんと。シャツを着てくださいよ」と笑いながらも、俺の上裸の写真を撮ってくれた。

楽しいひとときだった。

おそらく、体育系の男たちは、もう小学校の頃から、こういう思いを味わってきたのだろう。多少、荒っぽいことをしても、言いたい放題を言っても、どこまでが許されるかがわかっている。

だから俺も彼らのことを嫌いになることはなく、関係は続いていく。思えば、彼のトレーニングを受け始めて、もう 4 年の月日が流れているのだ。

3. 男になんてなりたくない！

俺だって、子供の頃、こういう付き合いを

したかったんだと思う。だけど、それができなかった。そこにはいくつかの要因があった。

① スポーツ音痴

何よりもスポーツ音痴だったことである。これは俺の母の家系からの遺伝だ。母側のおじいちゃんはまったくのスポーツ音痴で、兵隊にも行かれなかったと聞いている。母側のおばあちゃんは、俺を誰よりも愛してくれていたが、「万ちゃんも、スポーツさえできればねえ。昔はそんなのはどうでも良かったから」と母にもらしていたのだそう。俺がスポーツができないことは、子供の頃から俺の人生の癌だったのである。

このおばあちゃんの言葉から考えれば、昔はスポーツ能力なんてどうでも良かったのだろうか。それを裏付ける資料みたいなものはないのだが、俺たちの頃は、それより昔に比べてスポーツ教育が厳しくなっていたことは事実だったのかもしれない。実際、俺のおじさんもおじいちゃんに似てスポーツ音痴だが、おじさんは、適当に体育の授業をさぼって、そのことに悪びれもせず、普通に社会人になっていったのである。

② スポーツは似合わないという劣等感

俺は物心つくから、スポーツができないと言われ続けてきたので、スポーツをするのは、自分には似合わないという思いもあった。俺は大人しく本を読んだり、テレビを見たりしているタイプの子だったので、腕白とか悪ガキいう要素が全くない子だった。俺は子供の頃からワイルドなことをするのが似合わないと言われて育ったのだ。

だから、スポーツマンっぽいことをして

も似合わない。俺たちが小学校の高学年の頃 G ジャンが流行っていて、正月の親戚の集まりの時のために、母が俺に一着 G ジャンを買ってくれた。しかし、俺より 3 つ年上の従兄は、自分も G ジャンを着ているのに、俺の G ジャン姿を失笑した。「あんたには似合わないんだよ」

それ以来、俺は G ジャンは着なくなった。

俺の心が弱いと言われてしまえばそれまでだ。人からどう言われようが、気にしないで着ればいいのだと言われるかもしれない。しかし、俺は元々、G ジャンというタイプのキャラじゃないことは自分でもわかってたし、自分が気にしていることを、人に指摘されるのはひどく自尊心を傷つけられる経験なのである。

俺は男っぽいことをする柄じゃないのだという思いはずっと俺の心の底に染み付いていた。体育の時間は出来る限り自分は何もできないんだと無力に小さくなって過ごした。俺にとっては何もできない弱者でいるよりほかなかったのだ。それが自分の身を防御する唯一の方法だったのである。実際できなかったし、頑張ってしまうと似合わないと言われることは目に見えていたからである。

③男になると不当に厳しくされる

さらに、いつも話す小学校の高学年の時の女の先生だ。

この先生は女子には絶対に体罰をしないのに、男子には容赦なく顔が赤くなるくらいのビンタを喰らわす人だった。この先生が担任だった 3 年間、一度もこの先生からビンタされなかった男子は俺 1 人なのである。他は 1 人残らずビンタされた。一方で、

女子の方は1人としてビンタされた子はいなかったのである。

俺がビンタされないで済んだのは、一生懸命、自分の男の部分を抑えていたからである。ちょっとでも気を抜くと、その先生からビンタされる。ちょっとでも男の子らしい悪戯や腕白なことをしようものなら、容赦なくビンタが飛んでくる。

その女の先生の口癖は、「男の子は将来一家の大黒柱にならなきゃ行けないのよ」だった。「男は男らしく、女は女らしく」という考え方が非常に強い人だったのだ。「男は強くあらねばならないけれど、女は弱くても構わない」と言うのが、この人の考え方だった。

にもかかわらず、男の子が男の子っぽい腕白ぶりを発揮すると容赦なく殴る。自分が男子たちに男らしい男であることを強要しておいて、男が、男っぽいことをすると殴る。彼女は、全くの矛盾を男の子たちに押し付けていたのである。

俺は以前にもまして男の子集団から外れて行った。俺はその先生の体罰がそれくらい嫌いだった。俺だけは殴られないようにしようと思っていた。俺はだんだんと自分が男だということを憎むようになって行った。女の子の集団で遊ぶようになっていったのである。

セクハラはどれだけ相手が挑発的な格好をしていたにしても、誘惑的な態度をとったにしても、する方が悪い。それはフェミニストたちがずっと訴えてきたことだ。そうであるのならば、俺がキモい男だったにしても、運動神経ゼロであったにしても、Gジャンやタンクトップが似合わない男だったにしても、それを露骨に意地悪く言う方が

悪いのである。

そして、体罰もしてはならないことが定められているのに、自分の気まぐれで平気で体罰する先生の方が悪いのである。あの当時はコンプライアンスなんて、全くない世の中だったのだ。

サンドラ・ヘフェリンの『体育会系 日本を蝕む病』という本があるが、日本は体育ができないとそのあとにも希望がもてなくなる。まず、男の子らしい遊びから排斥される。俺はドッジボールの仲間にも入れなかった。このまま大人になって、社会人になっても付き合いゴルフだってできないだろう。そもそも友達もできなくていつだってハミ子だった。そんな俺が日本の体育会みたいな社会にはまっていけるだろうか。

俺はだんだんと現実の世界から逃避し、自分の世界で遊ぶようになっていったのだ。

4. 過去や現在を正しいと思わないで・・・

俺は高校になってすぐに不登校になった。学校にいても人目が気になって、先生の話聞くことすらできなくなり、完全に気が触れたような状態になってしまっていた。1年高校を休学しても治らず、その後、通信制の高校に移った。全てが惨めな毎日だった。母にも苦勞をかけた。近所の人たちからは白眼視される日々が続いた。

母はその当時から、ある宗教団体に頼るようになった。そして、一度母に連れられて、その団体に行った。

あれは17歳の時だ。通信制の高校に移って2年目になり、どうにか大検を目指して前向きに勉強していた頃だった。

その時、宗教団体の上の方の地位にある

おばさんが出てきた。母より年上の人だった。俺の状態がどうなのかということは母や他のおばさんたちから多少は聞いてはいたはずだったが、会ったのはその時が初めてだった。

そのおばさん、俺に会うなり、次のように偉そうに説教をし始めた。

「もう一度、高校を受験して、行かれることをお勧めします。ちゃんとプロセスを踏んでいかないと・・・」

ただでさえ、不登校でどうすることもできず苦しんでいる子に、こんなセリフを言ったらますます追い詰めるだろう。その時、俺はすでに3年も遅れていて、どうにか大検を受けて、大学に行こうと前向きになっていた頃だ。そんな時にこんなセリフを言われたんじゃ、ますます、迷いが生じる。

このおばさんの問題点は社会の仕組みや社会のプロセスを踏んでいくのが真っ当な生き方だと思っている、そのことに疑いすら持っていないところだった。形の方が先で、他の要素を全く考えていないのだ。そして自分の方が相手よりも正しいのだという思い込み。当時は、こういう人というのはたまにいたのである。

俺は普段大学生と接しているが、大学の場合は高校までとは訳が違うし、みんな大人である。アメリカの大学なんかだと25歳以上の大学生が40%もいるのである。しかし、日本は大学生であっても、1年や2年浪人したくらいのことを気に病んでいる子はたくさんいる。

それが、高校となったら尚更である。高校生はまだ管理の下に置かれる。軍隊のような統制下におかれる。そういう生活を3年も遅れてできるだろうか。

さらに、このおばさん、その後、高校の話になったときは、「私の知り合いの息子さんは、学校から帰ると目一杯勉強していました。高校生っていうのはそれくらい勉強するものですよ」とそれが当たり前のことみたいに断定した。

当時は確かに受験戦争は厳しかった。一流大学に入るためには3年間勉強にプライオリティをおかざるを得なかった。そのため、そういう日本の教育体制に対する批判もあったのである。しかし、このおばさんは社会のあり方に対する疑問を全くと言っていいほど持っていなかった。画一的な社会や周りと同調する社会を丸ごと受け入れていくのが、人間の真っ当な生き方であるかのように思っていたのである。

時は花の1980年代である。まだバブルが弾ける前だったので、好景気だった時代だ。努力すれば人間誰でも報われるという信念を持っていた人が多かったのである。

日本はサンドラ・ヘフェリンさんがいうように「同調圧力」と「根性論」の国だ。個人差なんかは全く無視して、周りと同じことができないやつは容赦無く糾弾される。根性なしと言われる。そういう国なのである。

当時は、それこそベルトコンベアーの時代。同じルーツを辿って、同じスーツをまとうって、同じ行程を歩んでいく。当時の日本人は、それが真っ当と思っていた。そういうアホな国だったのだった。

先日7/26(金)のニュースに出ていたのだが、熊本の中学で、遅刻した罰としてプールの端を走らせてやけどさせた体育教師のことが問題になっていた
(<https://news.yahoo.co.jp/articles/0e5e36>)

ab6f7b8154635b88cf4b88e6bc828a3d2d)。

まだいまだに、九州はこうなのである。

まして、九州の人吉である。人吉といえば、郡部のほうで、熊本市で暮らしている人間であっても滅多にいくことはない。熊本の郡部は、つい 10 数年くらい前まで、男子中学生に丸刈りを強制していた地域で、そういうところだから、意識が 50 年くらい遅れているのだと俺は偏見と差別に満ちたことを思ってしまうのだった。

まして、俺たちの頃は親だって先生だって、第二次大戦を潜り抜けた世代だった。だから、衣食住にも困るような時代を通り過ぎているから、学校での体罰や叱責ぐらいは軽いことみたいに思っている人が多かったのだろう。

だけど、過去や現在を正しいと思わないで！世の中は確実に変わっていく。人の心だって確実に変わるのだ。これ、前に日吉ミミの歌の歌詞にあったよね？笑

これを九州だけのことだと思いたい。

もう俺は九州に帰る気はないから、九州なんて異文化社会と思って、自分と切り離せばいいのだ。九州は保守的。共産党の力が強い京都とは、文化が大きく違っているのである。

とはいっても、俺は京都に来てからもう 40 年以上が経っているが、俺が京都に来てから接してきた人は主としてインテリ族である。

そもそも大学から大学院に進んで、大学の講師の仕事を始めた。当然のことながら、周りは超高学歴の人たち。

30 代になって、男性運動に参加したが、ここで出会った人たちも、大学関連者が多かったし、普通よりも遥かに学識のある人

たちだったのである。

そして最近になって、クリスチャンになり、教会に通い始めたが、教会にくる人たちもインテリ族の人ばかり。

従って、俺が京都に来てから出会った人たちは、ほとんど頭脳派で、優等生できた人ばかりなのである。これを基準にして、世の中を考えるのは間違いなのかもしれないのだ。

ちょうどお盆の頃、教え子の男の子 2 人と筋トレに行った。俺は体育会のやつが好きだ。俺が体育会とは程遠い性格だったから、体育会のやつを見ると羨ましくて、憧れてしまう。思えば、普段プライベートで食事に行ったり、卒業後も付き合いを続けているのは体育系のやつが圧倒的なのである。

彼らは本当に俺を持ち上げるのが上手い。ジムでも、親切に指導してくれるし、「先生、マッチョですよ」「僕の親父なんかには比べれば、はるかにしまっていますよ」と嬉しいことを言ってくれる。あまりにもお世辞が上手いので恥ずかしくなるくらいなのだ。

トレーニングが終わった後、サイゼリヤに行った。

ここでも、彼らは、「先生、僕が水持ってきます」「おしぼりどうぞ」と至れり尽くせりである。

俺は、彼らがあまりにも気を遣ってくれるので、やはり体育会だから、上下関係の厳しい世界を生きているせいかと思った。昔は体育会というと上下関係厳しくて怖いというイメージだったのである。しかし、彼らに聞いてみると、今はそれはないとのことだった。

ただ、「クラブの OB で、1960 年代、70 年代ぐらいにクラブにいた人だと怖いです

よ」と漏らしていた。

60年代、70年代に大学だった人といえ
ば、おそらく団塊の世代前後の人である。も
う戦争は経験していないにしても、学生運
動の嵐の中で育った人たち。人間は戦い、傷
つくことによって強くなるんだという古い
価値観に囚われていたのだろう。

いや、そこまで考えていなかったのかも
しれない。あの世代の人たちは今の感覚で
言えば単細胞なのである。思えば、俺が中学
くらいの頃、ちょうど映画とかに関心を持
ち始めた頃の映画やテレビドラマは単純で、
陳腐な内容のものが多かったと記憶してい
る。

あの当時、山口百恵主演の『赤いシリ
ーズ』が人気があった。『赤い疑惑』というド
ラマでは、彼女が白血病で若死にするまで
の物語をもうメロドラマに描いていた。不
治の病だけではなく、あり得ないような悲
劇が彼女をどんどん見舞っていく。今見る
とアホみたいな話なのだけど、あの頃の人
はあんなアホなものに夢中になっていたの
である。

映画でもそうだ。あの頃は、白血病で死ぬ
という映画が非常に多かったのである。し
かも、それを現実とは程遠い、あり得ないく
らいの御涙頂戴映画として描いていく。

この頃はそういう映画はめっきり減った。

これは時代の成熟だと俺は前向きに考え
ている。

5. 『チャレンジャーズ』(ルカ・グアダニーノ監 督・2024)

スポーツ映画にしてもそうだ。

70年代には、『ロッキー』(1976)が一斉

を風靡した。ああいう単純明快なスポ根映
画があつた頃は人気があつたのだ。

1996年『白い嵐』という映画があつた。
この映画は海兵隊の男の子たちと鬼の指導
者の話だが、これは褒めている人もいたけ
れど、俺は好きになれなかった。

1982年の『愛と青春の旅立ち』でも鬼の
軍曹が出てくるが、あの当時は鬼の軍曹を
ある面美化して描いていたのである。

もちろん、これらの映画の場合は、軍人を
志願している若い子を教育するという目的
があるからで、そうそう優しいことばかり
も言っていられないというのはあるのだろ
うが、それにしても行き過ぎだと俺は思っ
ていた。

そういえば、この当時までは、自動車教習
所の教官なんかでもヤクザ者みたいな人が
多かったのだ。

しかし、その後、時代が下るにつれて、そ
ういう単純なスポ根映画やしごき文化はな
くなっていった。

21世紀のスポーツ映画は、単なる根性も
のではなくなってきた。むしろ、男の子
にシンクロをやらせたり(『ウォーターボー
イズ』、女の子にサッカーをやらせたり(『ベ
ックカムに恋して』)という、クロスジェン
ダーの面白さを狙うものが増えている。

最近見たスポーツ映画でダントツで面白
かったのは、『チャレンジャーズ』である。
これはゼンデイヤの主演で、テニスの世界
を舞台にしている。

ここでは彼女が演じるテニスプレイヤー
が2人の男性テニスプレイヤーを同時に愛
し、しかも男2人もゲイ的な関係になって
いくところが、きわめてファッショナブル
に描かれる。すなわち、スポーツを介したバ

イセクシャルの話であり、ネタバレになるが、とりわけラストの男 2 人が抱き合う場面は秀逸である。

ある先生の話だと、最近の日本のアスリートが世界的に活躍するようになったのはシゴキ文化の衰退のせいだそうである。

先述の通り、アメリカでもスポーツ根性ものはもちろんあるが、日本はとりわけ根性論の国、練習させ過ぎるというのは昔から批判されていた。しかし、徐々にそういう文化はなくなってはいるのである。

おそらく、生徒をシゴく指導者や教官は、おそらく、そういう支配的な男が男の中の男だと思っていて、そういう男を演じることにハマっているのである。

しかし、そういう先生たちはもうオジイちゃん。近いうちに世の中から消えていくだろう。そう考えれば、世の中は悪くなんかになっていない。むしろ、多様性や感受性を大事にする世の中へと進化しているのである。

あと 10 年、20 年、とりあえず、まだ俺が活着している間に、今までの鬱憤が晴れるような世の中にならないかなあ。それが俺の切なる思いである。